

「不」と「非」の意味機能と造語機能
—2字結合語と3字結合語を中心に—

**The semantic function and word-formation function of “Hu” and “Hi”
-From two and three Chinese characters’ complex words-**

朴 景淑, 黄 平国

Jingshu PIAO, Pingguo HUANG

Abstract

“Hu” and “Hi” are used as negative Word-formation morphemes, and the authors try to find out the differences among the word-formation functions and semantic functions of “Hu” and “Hi”. In this paper, the authors group the two and three Chinese characters’ complex words of “Hu” and “Hi” by meaning. According to analyze the word-formation functions and semantic functions of “Hu” and “Hi” until the early modern period, the authors demonstrate the similarities and differences of the “Hu” and “Hi”. The negative meanings of “Hu” and “Hi” are similar, but the proclitic of them are different. By analyze the word-formation function, we find that the three Chinese characters’ complex words of “Hu” had been used before the early modern period, but only two Chinese character’s complex words of “Hi” had been used before the period.

Keywords: Hu, Hi, proclitic word, complex word

キーワード: 不、非、下接語、結合語

I. はじめに

「不」と「非」は否定の造語要素として使われている。「不誠実」と「非公式」はいずれも「～でない」という意味を表すが、「非誠実」と「不公式」とは言い難い。また、それぞれマイナス意味をもたらす語「不健康」、「非行」と、マイナス意味を持っていない語「不干涉」、「非会員」とがある。これらの言語現象を解明するには、「不」と「非」の造語機能と意味機能を明らかにする必要がある。

II. 先行研究

野村¹⁾は、現代雑誌九十種の用語調査と電子計算機による新聞の語彙調査¹⁾により主に否定の接頭語が二字漢語に付加される場合に着目し、否定の接頭語の結合対象となる語を実体概念と属性概念²⁾に分けて分析を行った結果、「不」と「非」はいずれも実体概念と属

¹⁾ 現代雑誌九十種の用語調査 (『国研報告 21・22・25』所収) は、昭和 31 年に発行された九十種類の雑誌から、延べ語数で約 44 万語を、電子計算機による新聞の語彙調査 (『国研報告 48』所収) は、昭和 41 に発行された三種類の新聞から、約 300 万語を標本として抽出されたものである。

²⁾ 野村¹⁾は、文脈の中で、コトやモノを表すとみられる語または否定の接頭語との結合形を「実体概念」を表す表現とし、サマを表すものを「属性概念」を表す表現としている。

性概念をさす語の前に前接し、属性概念を表す語のうち、性質や状態を表す語と結合する用法を持っており、「非」のほうが実体概念を指す語に結合しやすいと指摘している。なお野村¹⁾は、「不」がサ変動詞に付く場合、「～しない」という動作性を伴った意味に意識される傾向が強いと指摘しているが、一方で「動作性否定」と認められない場合も存在する。例えば「不消化」・「不調和」・「不用意」などの語は「消化しない」・「調和しない」・「用意しない」などの動作性否定よりも、「消化していない」・「調和していない」・「用意していない」など状態を示す語としての位置づけが妥当であろう。

拙稿²⁾では、NTTデータベースシリーズ『日本語の語彙特性 第7巻』³⁾により抽出した「不」と「非」に後続する2字下接語⁴⁾を名詞(N)、動名詞(VN)、形容動詞性名詞(AN)⁵⁾に分類して分析を行った。次の〈1〉と〈2〉に語例の一部を示す。

- 〈1〉 不 N(36語) 不経済 不衛生 不品行 …
不 VN(40語) 不許可 不処分 不成功 …
不 AN(37語) 不穏当 不活発 不得意 …
- 〈2〉 非 N(11語) 非金属 非衛生 非公式 …
非 VN(5語) 非公開 非課税 非上場 …
非 AN(1語) 非合法

「不」と「非」はいずれも名詞、動名詞、形容動詞性名詞の前に前接可能であるが、「不」は動名詞を下接語とする結合語が最も多く、「非」に比べて形容動詞性名詞の下接語も圧倒的に多い。一方で、「非」の下接語の多くが名詞であるのが特徴である。このような「不」と「非」の下接語の品詞の類似性により、「不経済/非経済」「不合理/非合理」「不衛生/非衛生」などの同形下接語を否定する語例がみられる。それぞれ「経済的でない」「合理的でない」「衛生的でない」という意味を表すことは共通しているが、次の〈3〉〈4〉のように、連体修飾をする場合、「不」の結合語は「(不+2字漢語)な」の接続形態が多いのに対し、「非」の結合語では「(非+2字漢語)な」は少なく、「的」と共起して使用されている。(用例の下線は筆者による。)

- 〈3〉 自分はそのような一生を幾片にも破断するような不経済なことは、けっしてしたくない。

阿部善雄『最後の「日本人」』2004年

³⁾ 考察対象とするデータはNTTデータベース『日本語の語彙特性 第7巻』である。『日本語の語彙特性』は、1985年から1998年までの14年間に発行された朝日新聞の紙面に基づいて朝日新聞社が作成した、全記事データ(単語数341771語)をコーパスとして用いたデータである。

⁴⁾ 「下接語」は、「不」または「非」の後につく語を指す。「結合語」は、「不」または「非」と結合した後の語を指す。

⁵⁾ 名詞、動名詞、形容動詞性名詞は以下のように分類している。

- ・名詞：名詞だけの品詞の語(例：規則・条理・成績)。
- ・動名詞：サ変動詞に成り得る名詞(例：許可・調和・飽和)。
- ・形容動詞性名詞：名詞と形容動詞の品詞を持つ語(例：穏当・可能・健康)。

- 〈4〉 また使用済み燃料の有効利用の側面でも、「燃料の単価が高く非経済的で、MOXの廃棄物の問題も起こる」と効果の薄さを強調。

朝日新聞/1997年

また、次の〈5〉〈6〉のように「不」は評価しうる範囲内で基準を満たさないことを表し、「非」は評価範囲外を表すこともできる。

- 〈5〉 市長は冒頭、「最近、私に関する雑誌などで、皆さんに不安や戸惑いを与えていることについて、本当に心苦しく思っています」と切り出し、「実に理不尽、不合理な内容が多い」と批判した。

朝日新聞/2007年

- 〈6〉 近代の文明は神秘や迷信などの非合理なものを排除し、科学的な合理性と効率の道を目指した。

朝日新聞/2006年

〈5〉の「不合理」は合理性で評価しうる範囲内で基準を満たさないものを指し、〈6〉の「非合理」は「神秘」、「迷信」などのように合理性で評価しうる範囲外にあるものを指す。

このように「不」と「非」には、下接語の品詞性及び結合語の形態、意味の類似点と相違点がみられる。従来の研究では、「不」と「非」の3字結合語に着目し、2字結合語については研究が進んでいない。しかしながら、「不漁」「不足」「非凡」「非礼」のように、「不」と「非」の2字結合語においても否定の意味が存在しているため、「不」と「非」の否定の意味の全体像をみるには、2字結合語も分析する必要がある。そこで、本稿では、「不」と「非」の2字結合語も考察範囲にいれ、3字結合語と対照しつつ、「不」と「非」の意味機能について概観した上、近世以前に既に使用されている2字結合語に対して、3字結合語は近世以前にどのような造語機能を持っているかについて考察を行う。

Ⅲ. 考察データと分類基準

本稿ではNTTデータベースシリーズ『日本語の語彙特性 第7巻』により「不」と「非」の2字結合語と3字結合語を分析対象とする。詳しい分類基準は以下に示す。

- a. 3字結合語にのうち、「不思議」・「不世出」のような現代語において「不/非+二字漢語」に分解できないものは対象外とする。
- b. 語の意味は、日本国語大辞典（第二版）⁴⁾を参照とし、結合語に二つ以上の意味がある場合、その後に数字（1、2、3…）を付加した上、否定する対象を示す。たとえば「不知」は、「知らないこと。知っていないこと。また、そのさま。」と、「知恵がないこと。思慮がないこと。愚かであること。また、そのさま。」といった二つの意味があり、前者を「不知1（知る）」、後者を「不知2（知恵）」とする。

- c. 「不」と表記し、「ぶ」と発音される語は結合語の後に（ぶ）と表記し、「ふ」、「ぶ」両方読まれる語は結合語の後に（ふ・ぶ）と記す。

IV. 「不」の2字結合語と3字結合語の否定の意味

上記の分類基準に基づき、本章では「不」の否定の意味について考察を行う。

- 〈7〉 不法就労はもちろん悪いが、外国人派遣サービスは重宝だった。
毎日新聞/2004年
- 〈8〉 僕は二度とその不注意な行為をくり返さなかった。
大藪春彦『小説すばる』2002年
- 〈9〉 当時の大学は、一、二年生の間は教養部というところで教養科目などを勉強することになっていました。これがどうも不評判で、はやく学部に進みたいと思う学生が多かったようです。
佐藤洋一郎『DNA 考古学のすすめ』2002年
- 〈10〉 事業者は不公正な取引方法を用いてはならない。
塩原義則『薬事関係法規・制度』2004年

〈7〉の「不法」の下接語「法」は、「法律」のことであり、「不法」は「法律という基準にそむく」という意味を表す。〈8〉の「不注意」は「注意が足りないこと」を表し、「不」の結合語は「足りない」の意味を表す。〈9〉の「不評判」は「評判が悪いこと」を表し、「不」は下接語に「悪い」という意味を付加する。また、〈10〉の「不公正」は「公正である」という状態の否定を表し、「不」の結合語は「～でない」の意味をもっている。

さらに、次の用例のように、「不」は「ない」の意味を表し、並びに動作または意思の否定と状態の否定を表すことができる。

- 〈11〉 不敵な面構えで、四十代半ばくらいだろうか。
斎藤純『銀輪の覇者』2004年
- 〈12〉 家庭と学校の不干涉が徹底している欧米では、家庭訪問は基本的に「ない」という。
朝日新聞/2001年
- 〈13〉 補修決議に不賛成の者は賛成者に区分所有権の時価での買い取りを請求できる。
神戸新聞/2002年
- 〈14〉 商売の成功不成功を決定するのは、ネックになっている部分ですから、いちばんネックになっていることを解決することが鍵になります。
邱永漢『お金の原則』2001年

〈11〉の「不敵」は「相手になる者がいないこと」であり、「不」の結合語は「ない」の意味を表す。〈12〉の「不干涉」は「干涉する」という動作の否定を表し、〈13〉の「不賛成」は「賛成する」の否定を表す。一方で、〈14〉の「不成功」は「成功する」状態の否定を表す。

このように「不」の結合語の意味は、以下の a~g に分類することができる。不の結合語は 234 語あり、以下に語例の一部を示す。

a (ある基準) にそむく／外れる／合わない

1 字下接語：不法 不意 1 (思い) 不順 1 (正道) …

2 字下接語：不本意 不条理 不徳義…

b (量、レベルなど) が足りない

1 字下接語：不才 不漁 不意 2 (注意) 不学 (ふ・ぶ) 不精 (ぶ) …

2 字下接語：不勉強 不注意 不見識 不人情 (ふ・ぶ) 不用意 (ふ・ぶ) …

c~が悪い

1 字下接語：不作 2 (作物) 不作 3 (作品) 不出 2 (出来上がり) …

2 字下接語：不首尾 不始末 不成績 不機嫌 (ふ・ぶ) 不行儀 (ふ・ぶ) …

d~でない

1 字下接語：不孝 不幸 不祥 不粹 (ぶ) 不興 (ふ・ぶ) …

2 字下接語：不公正 不健全 不公平 不器用 (ぶ) …

e~がない

1 字下接語：不敵 不二 不例

f (動作・意思) しない

1 字下接語：不言 不作 1 (耕作) 不参…

2 字下接語：不賛成 不承知 不処分 不養生 (ふ・ぶ) 不信心 (ふ・ぶ) …

g (状態) しない／していない

1 字下接語：不急 不朽 不具…

2 字下接語：不合格 不安定 不一致 不相応 (ふ・ぶ) …

上記の a~g の分類のように e「~がない」の意味を除いて、「不」の 2 字結合語と 3 字結合語はいずれも同様な意味をもっている。「不」の 3 字結合語には e「~がない」の意味が発達していないことは、否定接頭語である「無」に「~がない」の意味があることが考えられる。

「不」の否定の意味と対照しつつ、次に「非」の否定の意味について分析を行う。

V. 「非」の 2 字結合語と 3 字結合語の否定の意味

「非」の結合語の語例は 42 語あり、「不」の結合語 234 語に対して語例が少ないが、両者は意味の類似点と相違点がみられる。「非」の意味の分類について、以下に用例を挙げながら、説明を行う。

〈15〉日本国憲法がその立脚の原点に踏まえているこの非論理はより多く究明されるべきである。

辻義教『ヒト科ヒトによる人間の発見』2003 年

〈16〉田の土を掘る作業は、ふだんデスクワークばかりやっている非力な私の体力にはこ

たえた。

小宮宗治『定年後・八ヶ岳いなか暮らし』1999年

〈17〉少年の場合は、非行といっても育ち方や環境の影響が非常に大きいんです。

矢野達雄『マンガからはいる法学入門』2004年

〈18〉今日は休みで、非番です。

菅篤哉『一日一訓おじいさんのお話』2005年

〈15〉の「非論理」は、「論理の法則にかなっていないこと」の意味であり、下接語の「論理」を基準に、その基準に合わないという意味を表す。「非人情」は「人情にはずれること」、「非理」は「理に合わないこと」の意味があるように、「非」は「不」と同様に、「(ある基準)にそむく／外れる／合わない」という意味を表すことができる。〈16〉の「非力」は、「体力・腕力の弱いこと。あるいは、力量のとぼしいこと」を表し、「非」の結合語は「足りない」の意味を有する。また、〈17〉の「非行」は「不正な行ない、不良行為」の意味を表し、「非」は「悪い」というマイナス意味を付加する。〈18〉の「非番」の下接語は「当番」であり、「非番」は「当番でないこと」を表し、「非」は「～でない」の意味を付加する。

このように「非」は次の四つの意味をもっている。以下に語例の一部を示す。

a (ある基準)にそむく／外れる／合わない

1 字下接語：非法 非理 非道…

2 字下接語：非人情 非論理 非国民…

b (量、レベルなど)が足りない

1 字下接語：非学 非才 非力

c～が悪い

1 字下接語：非勢 非行 非望…

d～でない

1 字下接語：非常 非凡 非番…

2 字下接語：非現実 非衛生 非公式…

「非」の結合語は上述の四つの意味をもっているが、b「(量、レベルなど)が足りない」とc「～が悪い」の意味は、2 字下接語の否定には用いられていない。また、a～dの意味は「不」とも類似している。

「不」と「非」はいずれもd「～でない」の意味を持っているが、「不」は「不健康」「不親切」「不正直」のように、下接語の「健康」「親切」「正直」は状態を表し、「不」は「(状態)でない」という否定の意味を表す。一方で、「非」は「非凡」「非衛生」のような状態の否定のほか、「非金属」「非公式」のような「(事物・事態)でない」という意味も表すことができる。

また、「不」は1 字下接語及び2 字下接語を否定する場合、e「～がない」以外にa～g

の各否定の意味を表すことができるが、「非」と2字下接語の結合語は「～が足りない」「～が悪い」「～がない」の意味を表す語例がみられない。「非」の2字結合語における「足りない」「悪い」などのマイナス意味は、「非」の3字結合語の造語には影響されていないようである。『字通』⁵⁾から、「不」の字訓は「はなふさ・おおきい・しからず」とあり、「非」の字訓は「くし・そむく・わるい・あらず」とあることから、「不」は単純な否定、「非」は「わるい」というマイナス意味を伴う。しかしながら、「不」と「非」の3字結合語においては、「不」のほうが「悪い」という意味を伴い、「非」は、久保⁶⁾に指摘されたように「ある対象が、当該するカテゴリーに属していない」という否定の意味をもっている。次に、近世以前の文学作品から「不」と「非」の3字結合語の出現時期について概観することによって、「不」と「非」の3字結合語の否定の意味及び造語機能について通時的な考察を行う。

VI. 近世以前における「不」と「非」の3字結合語の使用実態

本節では『新編 日本古典文学全集』により、上代から近世にかけて「不」と「非」の3字結合語（異なり語数）の使用実態について分析を行う⁶⁾。

(1) 「不」の3字結合語の使用実態

「不」の3字結合語は、中古では「不牢固」1語のみである。

〈19〉(前略)「世界不牢固」(せかいふらうこ)とのみ思さるるぞ、げに、世の人の言(こと)ぐさに思ひきこえさせたるやうに、いかに変化(へんぐゑ)の現れたまへるにや。

狭衣物語 (1) P24/校注・訳：小町谷照彦 後藤祥子

〈19〉の「世界不牢固」は、「世皆不牢固」のことで、「世ハ皆(みな)牢固ナラザルコト水ノ沫(しぶき)・泡・焰(かげろふ)ノ如シ」(『法華経』随喜功德品(ずいきくどくほん)の偈(げ)の句)⁷⁾の引用である。「不牢固」の「不」は「確固としたものはない」という状態の否定を表し、仏教用語からの引用であることがわかる。

中世では、「不得心」「不相応」「不汚染」「不満足」「不自由」「不案内」などの6語がみられる。

〈20〉僻事を以て不得心(ふとくしん)の所望(しよまう)をなさば、

正法眼蔵随問記 P352/校注・訳：安良岡康作

〈21〉これに依(よ)つて、内(ない)・外(げ) 不相応(ふさうおう)の事出(い)で来(きた)る。

正法眼蔵随問記 P353

〈22〉ただ、身心(しんじん)を仏法(ぶつぼう)に投げ捨てて、さらに、悟道(ごだう)・

⁶⁾ 近世までの用例及び用例の出典、ページは、ジャパンナレッジの新編日本古典文学全集により検索したものである。また、用例の下線は筆者によるものであり、括弧内は右ルビを示す。

⁷⁾ 語例の意味は注釈または現代語訳を参照とする。

得法（とくほふ）をも望む事なく、修行する、これを不汚染（ふをぜん）の行人（ぎやうにん）と云ふなり。

正法眼蔵随問記 P474

〈23〉（前略）此願不満足（しぐわんふまんぞく）と舌をのごひ、誓不成正覚（せいふじやうしやうがく）と口をはく。

海道記 P81／校注・訳：長崎健

〈20〉の「不得心」は、注釈に「納得できないこと。不承知」とあり、納得する状態になっていないことを表す。〈21〉の「内・外不相応」は注釈に「心の内に思う事と、外に現れた行為とが一致しないこと」とあり、「不相応」は「相応しない」「一致しない」という状態の否定を表す。〈22〉の「汚染」は、注釈により「分別心をもってけがすこと」を表し、「不汚染」は、「そうした心を投げ捨てた、清浄の、または、絶対無上の意」であることから「不汚染」は「汚染していない」という状態の否定を表している。〈23〉は、注釈に「此ノ願ヒ満足セザレバ、誓ツテ正覚ヲ成サズ」（無量寿経上）による）とあり、「不満足」は「満足する」状態でないことを表す。

〈24〉「へエ、お腹立ちは重々（ぢゆうぢゆう）御尤もではござれども、おごうが居りませいで、何（なに）かにつけて不自由にござる。（後略）」

狂言集 P307

〈25〉愚僧は都不案内のものでござるによって、何（なに）とぞ都へ道案内をなされて下されうならば忝（かたじけな）うござる。

狂言集 P411

〈24〉の「不自由」は「自由でないこと」を、〈25〉の「不案内」は詳しく知っていないことを表す。

中世に新たに使用されている「不」の3字結合語うち、「不得心」「不相応」「不汚染」「不満足」の「不」は「(状態) しない／していない」を表し、「不自由」「不案内」の「不」は「～でない」という意味を付加する。また、「不得心」「不相応」「不汚染」の出典は、道元の法語がまとめられた『正法眼蔵随問記』であることと、「不満足」も仏教用語からの引用であることから、中世の「不」の3字結合語は、仏教用語の影響が大きいと思われる。

近世において、新たに出現した語例は28語あり、「不」は次のような否定の意味を表す。

a（ある基準）にそむく／外れる／合わない(3語)：不本意 不理屈 不作法（ぶ）

b（量、レベルなど）が足りない(9語)： 不人情 不見識 不詮索（ぶ）

不詮議（ぶ） 不用意 不用心 不所存 不掃除 不覚悟

c～が悪い(6語)：不了簡 不行儀 不調法（ぶ） 不器量 不首尾（ぶ）

不機嫌（ぶ）

d～でない（5語）：不器用 不全盛（ぶ） 不風流（ぶ） 不心中（ぶ）

不風雅（ぶ）

f(動作・意思)しない(4語)：不退転 不養生(ぶ) 不同心 不承知

g(状態)しない／していない(1語)：不落居

「不」は「不器用」「不風流」のような「～でない」という意味を表すほか、「(ある基準)にそむく／外れる／合わない」「(量、レベルなど)が足りない」「～が悪い」「(動作・意思)しない」、「(状態)しない／していない」など現代語と同様に否定の意味の多様性がみられる。以下に用例の一部を示す。

〈26〉髪切った後家女に、女敵とは不理屈ながら、これも調べて益ないこと。

近松門左衛門集(1)源五兵衛 おまん 薩摩歌 P289／校注・訳：鳥越文蔵 他

〈26〉の「不理屈」は現代語訳に「理屈に合わぬ」とあり「不」の結合語は「(ある基準)にそむく／外れる／合わない」という意味を表す。

〈27〉子どもの難儀(なんぎ)仕申(つかまつりまうし)候やうに、兄者人不覚悟(あにじやびとふかくご)いたし置かれ候。

井原西鶴集(3)万の文反古 P270／校注・訳：暉峻康隆 他

〈28〉父義盛の不詮議(ぶせんぎ)と、吐(ぬか)したやつら。素頭(すかうべ)打(ぶ)ち砕く。

近松門左衛門集(3)曾我会稽山 P366／校注・訳：鳥越文蔵 他

〈27〉の「不覚悟」は注釈から「油断して失敗すること」であり、「覚悟が足りない」という意味を表す。また、現代語訳から〈28〉の「不詮議」は「調べ不足」の意味であるように「不覚悟」「不詮議」は「～が足りない」という意味を表している。

〈29〉むかしは瘦馬(やせむま)にもものつて、鑓(やり)の一筋ももたした人でござれば、こんな事きかれましたら、不行儀(ふぎやうぎ)ものめと、逆(とても)いけてはおかれますまい。

浮世物語集 野白内証鑑 P245

〈30〉あげ畳(だたみ)といふ事は、簀子(すのこ)の下へ道を付けて、不首尾(ぶしゅび)なればぬけさすなり。

井原西鶴集(1)好色一代男 P122

〈29〉、〈30〉の「不行儀」「不首尾」はそれぞれ「行儀が悪い」「首尾が悪い」の意味を表し、「不」は「悪い」という意味を付加する。

〈31〉(前略)天命を知る年になりて、平生(へいぜい)の不養生(ぶやうじやう)にて頓死(とんし)をせられける。

井原西鶴集(3)日本永代蔵 P46

〈32〉また女郎のかたより文日(もんび)をたのめば、大かた十人の客七、八人迄(まで)

は不同心（ふどうしん）の（かほ）見ゆる、是は何たる事ぞや。

浮世草子集 好色敗毒散 P68

〈31〉の「不養生」は「養生しないこと」、〈32〉の「不同心」は「同意しないこと」を表し、「不」は「(動作・意思)しない」という否定の意味を表す。

〈33〉職人の手前は濟みながら、不落居（ふらつきよ）なことにて、道具を止（と）められ、下（くだ）りませぬと。

近松門左衛門集（1）おなつ清十郎 五十年忌歌念仏 P26

〈33〉の「不落居」は注釈に「合点のいかないこと。風変わりなこと。」とあり、「落ち着かない、落居しない」という意味を表すので、「不」は「落ち着いた」状態になっていないことを表す。

〈34〉（前略）寺（てら）にあげて手習ひをさすれども、芸能（げいのう）の方（かた）はことのほかに不器用（ふきよう）なり。

浮世物語 P92／校注・訳：谷脇理史 他

〈35〉さやうのおもはく持ちたる上藤（じやうらふ）は、大様不全盛（ぶぜんせい）なるものなり。

けしずみ P415／校注・訳：谷脇理史 他

〈34〉は現代語訳に「武芸・学芸のほうは、とりわけ無器用な子供だった。」と解説され、「不器用」は「器用でない」という意味を表し、〈35〉の「不全盛」は注釈に「はやらない。客があまりつかない。」とあり、「全盛でない」という意味を表している。

中古から中世にかけて「不」は「(状態)しない／していない」と「～でない」という意味を表し、主に仏教関連の文献に使用されている。近世になって「不」は、新たに「(ある基準)にそむく／外れる／合わない」「(量、レベルなど)が足りない」「～が悪い」「(動作・意思)しない」などの意味を表すようになり、現代における「不」と同様に意味の多様性がみられる。現代において「～が足りない」の意味は造語力を持たず、その他の意味を持つ語は増えており、とりわけ「～でない」の意味の語が多く定着している。

中古から近世にかけて「不」の3字結合語の否定の意味と語数について現代と対照しつつ、次の表にまとめる。

また、近世に新たに出現した28語のうち、「不全盛（ぶ）、不風流（ぶ）、不心中（ぶ）、不風雅（ぶ）、不養生（ぶ）、不調法（ぶ）、不首尾（ぶ）、不機嫌（ぶ）、不作法（ぶ）、不詮索（ぶ）、不詮議（ぶ）」などの11語は、右ルビに「ぶ」と記されていることから、「不」の結合語にはマイナス意味が込められていることが窺える⁸。須山⁷は、ブツ（打）が「ブチコロス、ブチノメス、ブチマケル、ブンナグル」など殴打の動作の類の用法に用いられることから、相手に危害を加えるような「ぶ」という濁音が嫌悪感を催す意味を背負って「不」の変形として成り立つ事情が考えられると指摘している。

⁸ 日本国語大辞典の「ぶ【不】」の項目では「体言につけて、それを打ち消し否定したり、その内容がよくない意を表わしたりする語。無（ぶ）。「不細工」「不調法」「不恰好」「不器量」「不器用」など。」と解説されている。

表 「不」の3字結合語の出現時期及び否定の意味

否定の意味	中古	中世	近世	現代
a (ある基準) にそむく／外れる／合わない	—	—	3 語	6 語
b～が足りない	—	—	9 語	8 語
c～が悪い	—	—	6 語	21 語
d～でない	1 語	2 語	5 語	41 語
e～がない	—	—	—	—
f (動作・意思) しない	—	—	4 語	21 語
g (状態) しない／していない	—	4 語	1 語	18 語

(2) 「非」の3字結合語の使用実態

「不」に対して、「非」の3字結合語は、中古の「非参議」、中世の「非学生」二つの語例がみられる。

〈36〉なまなまの上達部 (かむだちめ) よりも、非参議 (ひさんぎ) の四位どもの、世のおぼえ口 (くち) 惜 (を) しからず、もとの根ざしいやしからぬ、やすからに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。

源氏物語 (1) 帚木 P59 / 校注・訳：阿部秋生 (他)

「非参議」は、注釈に「三位以上でまだ参議にならぬ者、四位で一度参議に任ぜられたことのある者、四位でも参議の資格をもつ者、「非参議の四位ども」は上記の第三にあたる」とあり、「非参議」は「参議でない」の意味から「非」は、「～でない」という否定の意味を表す。

〈37〉「御文 (ごぶん)、本 (もと) より非学生 (ひがくしやう) にて、子細 (しさい) を知らぬさかしらする物かな。(後略)」

沙石集 P239 / 校注・訳：小島孝之

現代語訳では「そなたはもともと学僧ではないから、訳も知らずに差し出口をするのよ。」のように「非学生」は「学僧でない」の意味から、「非」は「～でない」という否定の意味を表す。

「非」の3字結合語は、近世以前では「非参議」「非学生」の2例のみで、「参議」「学生」という職名と身分の否定に用いられている。「非」の2字結合語における「基準以下」「悪い」などのマイナス意味及び「非」の文字そのものがもっているマイナス意味は非の3字結合語の造語には影響されていない。

Ⅶ. おわりに

本稿では「不」と「非」の2字結合語と3字結合語を意味により分類し、近世まで「不」

と「非」の3字結合語の意味機能と造語機能について考察を行った。「不」は「(ある基準)にそむく／外れる／合わない」、「(量、レベルなど)が足りない」、「～が悪い」、「～でない」、「～がない」、「(動作・意思)しない」、「(状態)しない／していない」といった7つの意味をもっている。「非」は「(ある基準)にそむく／外れる／合わない」、「(量、レベルなど)が足りない」「～が悪い」「～でない」という意味をもっている。「不」と「非」はいずれも「～でない」という意味をもっているが、「不」はもっぱら「(状態)でない」という意味を表し、「非」は状態の否定のほか、「(事物・事態)でない」という意味も表すことができる。「不」は「～がない」以外に2字結合語と3字結合語ともに、各意味による造語がみられるが、「非」の2字結合語のもつ「足りない」「悪い」の意味は、「非」の3字結合語の造語には影響を与えていない。造語機能からみた場合、「不」の3字結合語は、既に近世以前から使用され、とりわけ近世の文学作品においては現代語のもつ各意味による造語がみられる。一方で「非」の3字結合語は中古の「非参議」、中世の「非学生」という二つの語例のみであり、職名と身分の否定を表し、「非」の否定の意味は「～でない」という範囲外を表す。近世以前から「不」は「ぶ」と読まれる語が多いため、「不」の結合語にはマイナス意味が込められていることが窺える。「ふ」と「ぶ」及び「無」の関わりについては今後の課題とする。

参考文献

- 1) 野村雅昭：否定の接頭語「無・不・未・非」の用法．国立国語研究所『ことばの研究』，第四集，1973.
- 2) 朴景淑：字音接辞「不」と「非」との相違点．國語學懇話會編『みくにことば』中日出版社，2015.
- 3) 近藤公久、天野成昭編著：NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性 第7巻，三省堂，2000. CD-ROM.
- 4) 日本国語大辞典（第二版）<<http://nikkoku.jkn21.com>>
- 5) 白川静：字通．平凡社<<http://japanknowledge.com>>，1996
- 6) 久保圭：否定表現に関わる動的プロセスと価値判断について—日本語の否定接頭辞を中心に—．京都大学大学院 人間・環境学研究科 言語科学講座『言語科学論集』16，2010.
- 7) 須山名保子：接辞「不」「無」をめぐって．学習院大学国語国文学会誌 17，1974.

用例出典

- ・現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版） BCCWJ-NT
 - ・1994年～2002年『新編 日本古典文学全集』（全88巻）小学館
- <<http://japanknowledge.com>>